令和5年度アルコール健康障がい対策部会の概要

資料2－2

【第1回】 R5.10.4　@ドーンセンター　大会議室３
（１）女性のアルコール関連問題の現状と今後の支援について　　（２）アルコール健康障がい予防啓発について　　（３）その他

① 女性のアルコール関連問題の現状と今後の支援について

＊医療、回復施設、自助グループの立場から、それぞれの支援の状況や課題について話題提供いただいた後、委員より意見を伺った。（発言意見を一部要約）

（各機関での取組みについて）

・**女性ユニットの開設**（医療機関や回復施設）や、**女性のみのミーティングや例会**（医療機関・回復施設・自助団体）を行っている。
・1年に1回**女性のみの一日研修会**を行っている。例年150名くらいの参加がある。**女性のアルコール依存症者の体験談冊子**も作成。（自助団体）
・女性ユニットでは、**さまざまな活動の機会を持つ**ことを目的に、カフェでの仕事や内職作業、老人ホームや病院での仕事など福祉的就労の機会を提供。（回復施設）
・リストカットや過量服薬を繰り返すケースに対し、**感情を調整することで、効果が得られたり、自己効力感が上がる**といわれており、アルコールだけに特化せずに女性だけのプログラムを行っている。(医療機関)
・女性のみのグループを実施しているが、アルコール以外の依存症等の問題を抱える人も参加するプログラムのため、**ジェンダーの視点やトラウマの回復、家族関係の問題**などを中心に実施。(医療機関)
・薬物依存症の女性プログラムを実施する際に、薬物そのものを取り扱う時間を減らし、一緒に作業をしたり**「居場所」になるように**意識している。また、アンガーマネージメントやアサーティブなコミュニケーションの取り方など**対人関係をテーマに取り入れる**等の工夫をしている。(精神保健福祉センター)
・女性ミーティングをする中で、新たに**「親子の会」**をしている。アルコール依存症の親と子どもが一緒に参加し、子どもがいる親同士が出会う。**子どもは、「アルコール依存症」について知り、**「本当のお母さんと病気のお母さんは違うんだ」ということを知ってもらい、また、**子ども同士も一緒に遊ぶ時間**を持っている。（医療機関）

（支援につながっている女性の特徴）

・入院に至るケースは、外来と比べ、**生活基盤が不安定**なことが多い。（医療機関）
・女性の場合は、**薬物乱用の既往歴や、精神疾患がある人が多く**、特に20～30歳代の若い人にその傾向が強い。（医療機関）
・（委員の所属機関である）回復施設につながっている人は、**単身で無職の人が多い。**（回復施設）
・初回飲酒の年齢が10歳代、あるいはもっと若い時に飲酒をしている人が多く、**子ども時代の生きづらさの問題が影響**しているといえる。（回復施設）
・**背景にいくつかの問題が複合している**ことが多く、DVや性虐待を受けていたり、機能不全の家庭で育ったなど、家族の問題もある。また、大切な家族の死などによって、飲酒が進んでしまったという話もある。（回復施設）
・保健所では**子育てをしている人**とつながることも多い。出産や育児、家事など、女性に**負担が多くかかり、それを乗り切るためにお酒の力を借りている**人も多い。（保健所）
・**介護が必要な人の家族**にアルコール問題がわかることがあるが、支援者が入るときは**隠したり、家族もなかなか相談しようとしない**ことがある。（民間支援団体）
・自殺未遂者支援の中で、**死にたい思いをもっている**女性にアルコールを乱用している人が多い印象がある。若い女性から中高年層の女性まで幅広い年齢層でみられる。（精神保健福祉センター）
・女性のアルコール依存症の中で、仕事をしている人としてない人では、**仕事をしている人の方が飲酒量が多い**という報告もある。（関西アルコール関連問題学会）

（女性の支援についての課題）

・まだまだ**女性の自助グループが少ない**。（自助団体）
・本人が女性の場合は、家族である夫が家族グループにつながりにくい。**家族グループは女性が多い中、男性が参加しづらい**ことがある。（自助団体）
・背景にある問題から、**トラウマに焦点をあてたかかわりやプログラムの導入が必要。**（医療機関）
・若い女性は回復施設につながっても**定着しない**こともあり、その後の**フォローが課題。**（回復施設）
・グループ等の集団では、**すぐに仲良くなるものの、急に嫌いになったり**、**内部で小グループができたりする**こともあり、どのようにグループを管理運営するのか支援者の力量が問われる。（医療機関）
・**集団の中に入っていくのが苦手な人**も多い。そういった人にはオンラインかのグループへの参加が、セルフヘルプグループ参加の入り口として効果がある。（医療機関）
・子どものいる人への支援については、**子ども側の支援者は子ども中心**に考えるため、「（アルコール依存症である親を）どうにかしてほしい」「入院させてください」と相談が入る。世代間連鎖の問題やリスクなど**依存症について共に学び、連携していく**ことが必要。（医療機関）
・女性特有の背景要因を明らかにしたり、プログラムの利用が困難となったり、自助グループにつながりにくい**理由の分析**が必要。（精神保健福祉センター）
・女性の支援を考える時には、周産期が重要。**周産期は、女性の抱えるすべての問題へのアプローチのスタートになりやすい**。（精神保健福祉センター）

② アルコール健康障がい予防啓発について

＊令和5年度アルコール関連問題啓発週間における大阪府の取組みについて紹介し、啓発について委員より意見を伺う。（発言意見を一部要約）
・啓発の方法について、**対象を絞り、寄り添うような文言**などを使うことがいいのではないか。
・啓発フォーラム等を活用し、**府民を対象にも啓発**が必要